

牛乳・乳製品



◆飼養動向

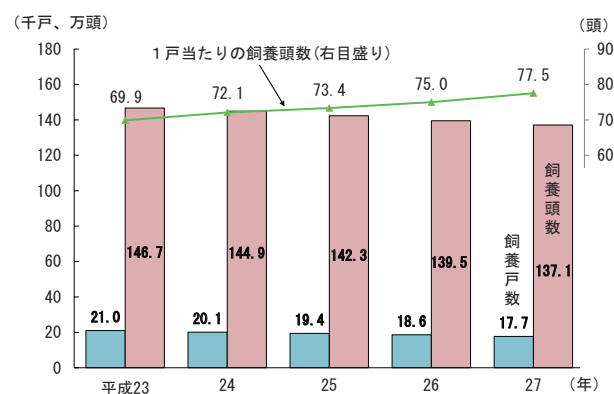
27年2月現在の乳用牛飼養頭数、1.7%減少

乳用牛の飼養頭数は、近年減少傾向で推移しており、平成27年2月には137万1000頭（前年比1.7%減）となり、前年をわずかに下回った。

飼養戸数は、高齢化や後継者不足に加え、飼料価格の高止まりによる収益性の低下などを受け廃業が進んでおり、27年には前年を900戸下回る1万7700戸（同4.8%減）と、やや減少した。

この結果、27年の1戸当たりの飼養頭数は、前年をわずかに上回る77.5頭（同2.5頭増）となった（図1）。

図1 乳用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」

注：各年2月1日現在。なお、27年は概数値。

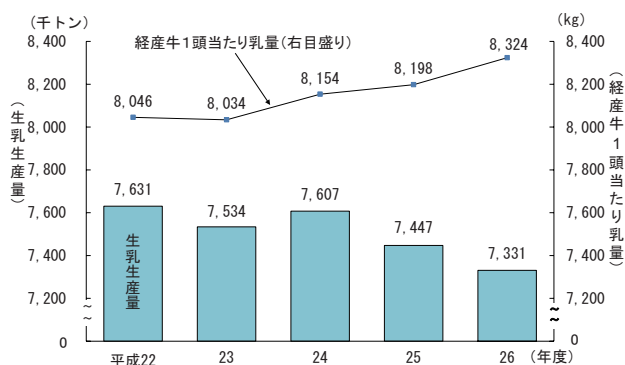
◆生乳生産量

26年度の生乳生産量、1.6%減少

生乳生産量は、平成8年度に約870万トンでピークとなり、その後、都府県における減産により、減少傾向で推移してきた。24年度は生産の回復がみられ、760万7400トン（前年度比1.0%増）とわずかに増加し、7年ぶりに前年度を上回ったものの、25年度は744万7000トン（同2.1%減）とわずかに減少、26年度も733万900トン（同1.6%減）とわずかに減少し、2年連続の減少となった。

一方、経産牛1頭当たりの乳量は、26年度は8324キログラム（同1.5%増）と、3年連続で増加した（図2）。

図2 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量（全国）



資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」および「牛乳乳製品統計」

注：26年度の経産牛1頭当たり乳量は概数値。

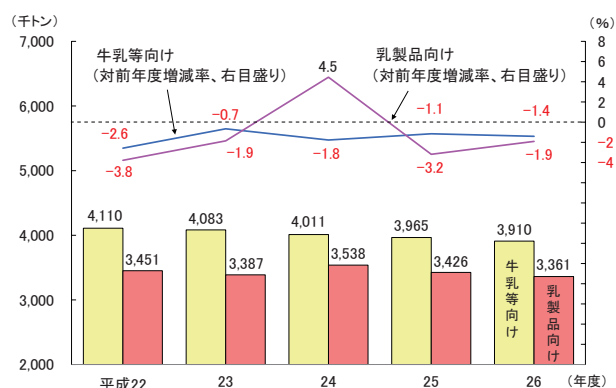
◆牛乳等向け処理量

26年度の牛乳等向け処理量、1.4%減

生乳の牛乳等向け処理量は、消費動向を反映して推移しているが、近年は少子高齢化やその他飲料との競合などから消費が伸び悩んでおり、平成6年度をピークに減少傾向で推移している。25年度は飲用牛乳等（牛乳、加工乳・成分調整牛乳）の需要が減少したことから、396万4600トン（前年度比1.1%減）となった。26年度も391万200トン（同1.4%減）と減少し、12年連続の減少となった（図3）。

また、国内生産量のうち、牛乳等向け処理量の割合（市乳化率）は、53.3%と、前年度より0.1ポイント高くなった。

図3 用途別処理量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

◆乳製品向け処理量

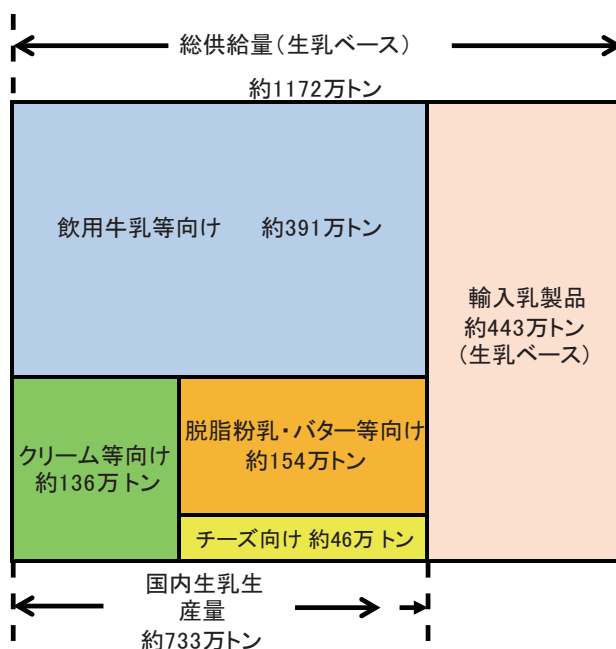
26年度の乳製品向け処理量、1.9%減少

乳製品向け処理量は、生乳生産量が減少する中、23年度に338万7300トン（前年度比1.9%減）と2年連続で前年度を下回った。平成24年度は、生乳生産量の回復に伴い、353万8100トン（同4.5%増）と増加に転じたものの、再び生乳生産量が減少したことから、25年度は342万5600トン（同3.2%減）、26年度は336万1200トン（同1.9%減）と2年連続で前年度を下回った。こうした中、乳製品向け処理量のうち、26年度のクリーム等向け処理量は、堅調な需要を反映して121万3200トン（同2.0%増）と7年連続で増加した。

26年度の乳製品輸入量は、生乳ベースで約443万トンとなり、国内生乳の供給量と合わせた生乳ベースの総供給量は、約1172万トンとなった（図4）。

なお、脱脂粉乳・バター等の特定乳製品に仕向けられる生乳については加工原料乳生産者補給金の交付対象となっているが、26年度から、国は国産チーズの生産拡大を図るために、ナチュラルチーズを特定乳製品に追加し、「チーズ向け生乳」を補給金の対象と位置づけている。

図4 生乳の需給構造の概要（26年度）



資料：農林水産省生産局「畜産をめぐる情勢」

注1：四捨五入の関係で、必ずしも計が一致しないことがある。

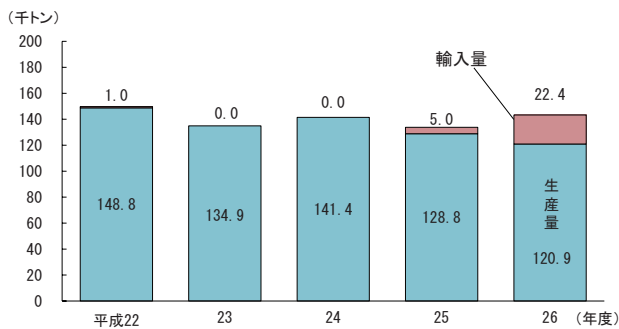
2：国内生乳生産量のうち、約6万トンの生乳が自家消費等に仕向けられている。

◆脱脂粉乳

26年度末在庫量は15.6%増、大口需要者価格は上昇

脱脂粉乳の生産量は、平成26年度は、前年度に引き続き生乳生産量の減少に加え、クリームやチーズ向けの生乳処理量が増えたことなどから、12万900トン（前年度比6.1%減）と2年連続で前年度を下回った（図5）。

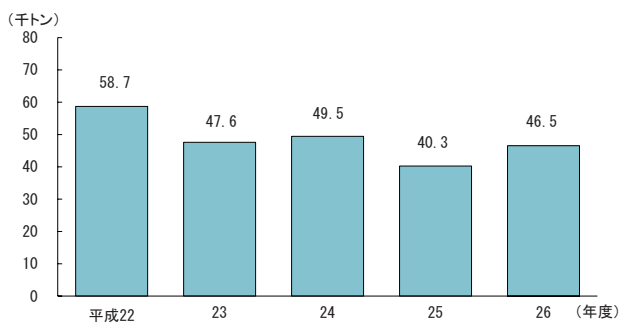
図5 脱脂粉乳の生産量・輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：輸入量は機構輸入分のみ。

一方、期末在庫量は、25年度は生産量減少の影響を受け4万300トン（同18.6%減）と前年度を下回り、低水準となった。26年度はカレントアクセスに加え追加輸入を行ったことから、4万6500トン（同15.6%増）と、24年度の水準には届かなかったものの、前年度を大きく上回った（図6）。

図6 脱脂粉乳の期末在庫量



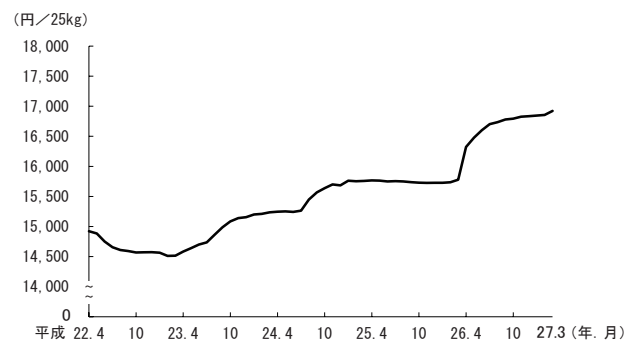
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

26年度の推定出回り量は、生乳生産の減少を受け、13万8400トン（同3.2%減）と前年度をやや下回った。

脱脂粉乳の大口需要者価格は、国内の在庫量が高い水準にあった21～22年度は低下傾向にあった。しかし、23年度以降上昇に転じ、24年度平均は25キログラム当たり1万5526円（同3.8%高）、25年度平均は同1万5746円（同1.4%高）となった。さらに逼迫した需給状況となった26年度平均は、同1万6,725円（同6.2%高）となった（図7）。

なお、26年度にはこうした需給動向を受け、機構はカレントアクセス分として脱脂粉乳5000トンを入力したのに加え、追加分として1万トンの輸入契約を締結した。

図7 脱脂粉乳の大口需要者価格



資料：農林水産省生産局調べ

注：消費税を含む。税率は平成26年4月1日以降8%、それ以前は5%。

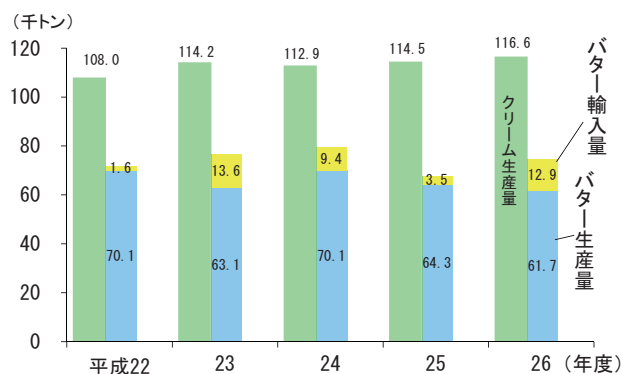
◆バター・クリーム

バターの26年度末在庫量は26.2%減少、大口需要者価格は上昇

バターの生産量は、平成24年度は生乳生産量が回復したことから、7万100トン（前年度比11.2%増）とかなり大きく増加した。25年度は、飼料作物の品質低下などによる生乳生産量の減少に伴い、特定乳製品向けの生乳仕向け量が減少した結果、6万4300トン（同8.3%減）とかなりの程度減少した。さらに26年度も生乳生産量が減少した結果、6万1700トン（同4.1%減）とやや減少した。

クリームの生産量は、24年度は11万2900トン（同1.2%減）となり、わずかに前年度を下回ったが、コンビニエンスストア向けデザート類などの需要が堅調であったことから、25年度は11万4500トン（同1.4%増）、26年度も11万6600トン（同1.8%増）と増加した（図8）。

図8 バター、クリームの生産量・輸入量

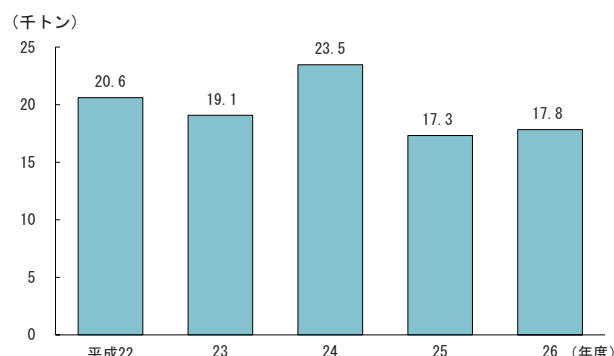


資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

バターの期末在庫量については、24年度は生産量が回復したことやバター輸入を実施したことなどから、2万3500トン（同23.0%増）と、3年ぶりに前年度を上回った。25年度は生産量がかなり減少したことから、1万7300トン（同26.2%減）と大幅に減少し、26年度は1万7800トン（同3.0%増）と、前年度をやや上回ったものの、低水準となった（図9）。

バターの26年度の推定出回り量は、7万4362トン（同0.3%増）と、前年度と比べわずかに増加したものの、26年末の需要期以降、店頭で家庭用バターが品薄となる小売店がみられた。

図9 バターの期末在庫量

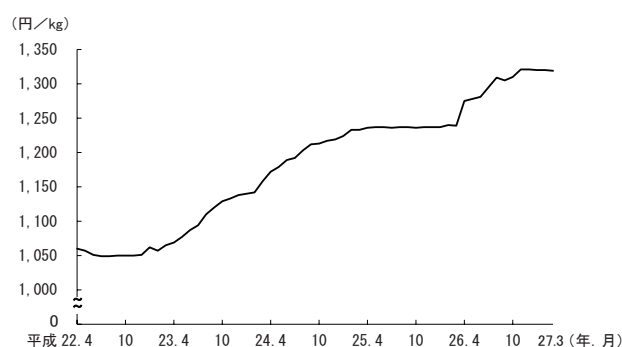


資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

バターの大口需要者価格は、21年度に生産量、在庫量ともに増加したことから、3年ぶりに前年割れとなり、22年度に入ってから、ほぼ横ばいで推移した。23年度からは、在庫量が低い水準となったことや、配合飼料価格の上昇に伴う加工原料乳価の引き上げなどのコスト増から上昇傾向に転じ、24年度平均は1キログラム当たり1207円（同8.1%高）、25年度平均は同1237円（同2.5%高）となった。さらに26年度平均は同1305円（同5.4%高）と上昇した（図10）。

なお、こうした需給動向を受け、機構は26年度のカレントアクセス分のバター6000トンに加え、追加分として7000トンの輸入契約を締結した。

図10 バターの大口需要者価格



資料：農林水産省生産局調べ

注：消費税を含む。税率は平成26年4月1日以降8%、それ以前は5%。

◆チーズ

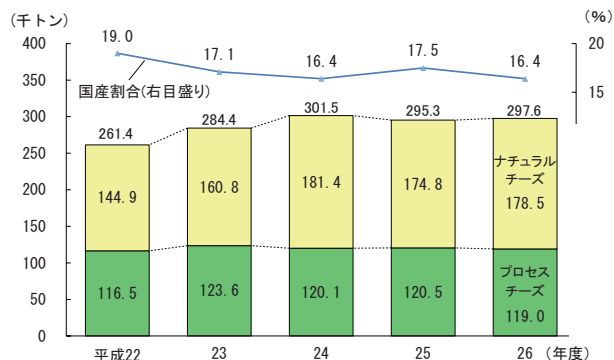
26年度の総消費量、0.8%増加

チーズの総消費量の推移

チーズの総消費量は、平成21年度以降、国際価格が低下し、輸入量が増加したことに加え、製品価格の値下げなどもあり、国産の生産割合は小さくなりつつも、24年度まで増加傾向で推移したが、25年度は減少に転じた。

26年度の国産ナチュラルチーズ生産量は4万6200トン（前年度比4.9%減）とやや減少したものの、直接消費用ナチュラルチーズ消費量は17万8500トン（同2.1%増）とわずかに増加した。また、プロセスチーズ消費量は11万9000トン（同1.2%減）とわずかに減少したが、ナチュラルチーズとプロセスチーズを合わせた総消費量は29万7600トン（同0.8%増）となり、前年度をわずかに上回った（図11）。

図11 チーズの総消費量と国産割合



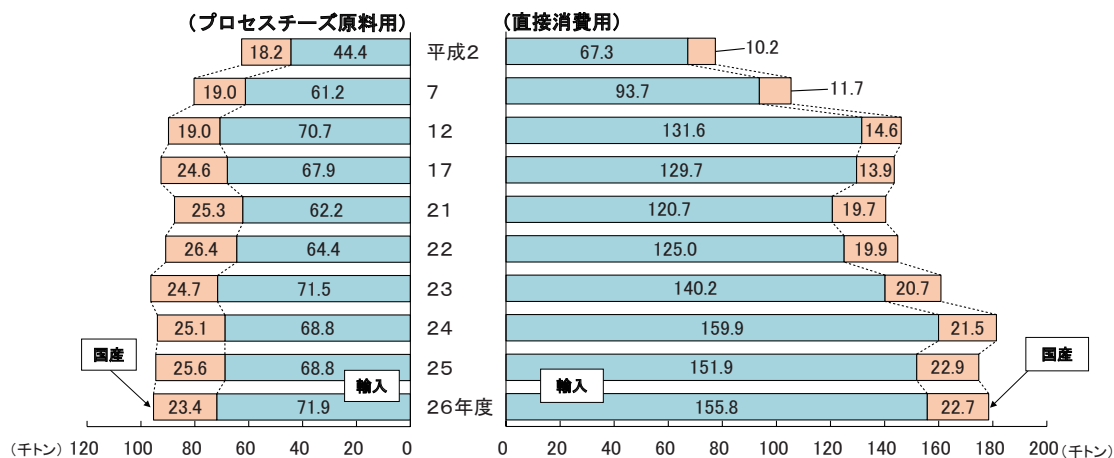
資料：農林水産省生産局「チーズの需給表」

ナチュラルチーズの生産量・輸入量

26年度のナチュラルチーズの輸入量（プロセスチーズ原料用+直接消費用）は、22万7700トン（同3.1%増）とやや増加し、5年ぶりの減少となった前年度を上回った。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用は、7万

1900トン（同4.4%増）とやや増加し、直接消費用は、15万5800トン（同2.6%増）とわずかに増加した（図12）。

図12 ナチュラルチーズの生産量・輸入量



資料：農林水産省生産局「チーズの需給表」

国産ナチュラルチーズの生産量（プロセスチーズ原料用+直接消費用）は、需要の拡大を背景に堅調に推移しており、23年度は、生乳需給がひっ迫基調で推移したことから7年ぶりの減少に転じたものの、24年度は、プロセスチーズ原料用、直接消費用がともに前年度を上回ったことから、4万6500トン（同2.4%増）と、再び増加に転じた。

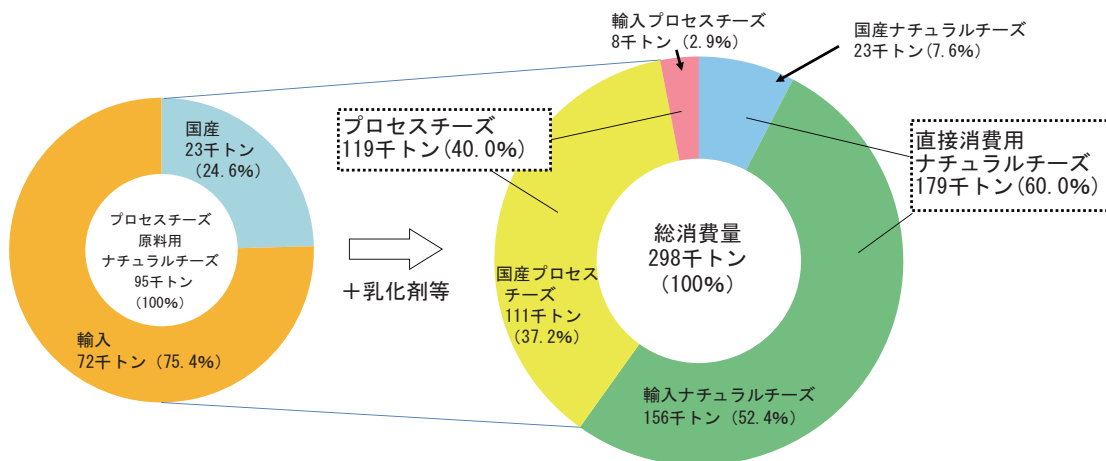
25年度は、4万8500トン（同4.3%増）と過去最高となったものの、26年度は生乳生産量の減少から、4万6200トン（同4.9%減）とやや減少した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用が2万3400トン（同8.5%減）とかなりの程度減少した一方、直接消費用は2万2700トン（同0.9%減）とわずかな減少にとどまった。

チーズ総消費量の内訳

26年度のチーズ総消費量における国産チーズの割合は、国内生産量が減少したものの、輸入量が増加したことから16.4%と、前年度より1.1ポイント低下した。

また、プロセスチーズ原料用のナチュラルチーズに占める国産の割合は、24.6%と2.5ポイント低下した（図13）。

図13 26年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省生産局調べ

注：直接消費用ナチュラルチーズとは、プロセスチーズ原料用以外のものを指し業務用その他原料用を含む。

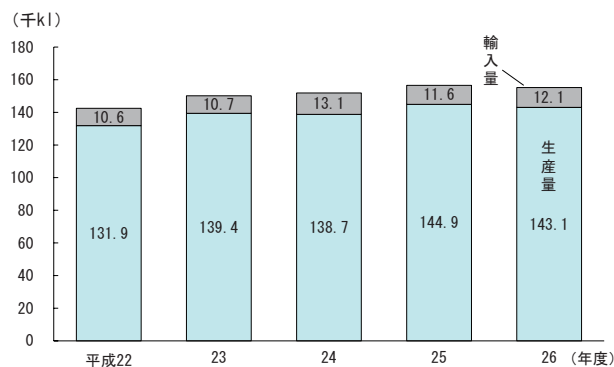
◆アイスクリーム

26年度の生産量、1.3%減少

アイスクリームは、近年、豊富な品揃えにより、消費者の購買頻度が高まっている。平成25年度の実生産量は、14万4900キロリットル（前年度比4.4%増）と、2年ぶりに増加したが、26年度は14万3100キロリットル（同1.3%減）となった。

輸入量は、24年度は1万3100キロリットル（同22.5%増）と大幅に増加したが、25年度は輸入価格の上昇を背景に、1万1600キロリットル（同11.6%減）と3年ぶりに減少した。26年度は、1万2100キロリットル（同4.4%増）とやや増加した（図14）。

図14 アイスクリームの生産量と輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」

注：輸入量は、1トン=1.455klで換算。